枇杷ハチマキ果に関する知見

櫻井 基夫

SAKURAI, M: Ocservations on the russet of loquat fruits.

枇杷の栽培地佐賀縣小城郡東多久村納所に於ては「ハチマキ」果の被害が相當にある。筆者は同村の依頼を受け昭和 14 年 11 月より同 15 年 6 月まで調査を行つた。その後繼續する事が出来なかつたので、甚だ不備な資料ではあるが、参考に資するため發表したいと思う。

開花期との關係

開花期別に調査せる結果は次の通りである。

開 花 期	調査果數	枯死果數	成育果數	鉢巻果數	被害程度
昭和14年11月27日	53	51	2	2	甚
14. 12. 26	49	47	2	2	"
15. 1. 5	51	50	1	1	"
15. 1. 14	56	49	7	7	中
15. 1. 24	69	17	52	34	"
15. 2. 14	36	5	31	12	中,輕

上記の如く早咲きの果は殆んど枯死し、成育するもの極めて少く、1 月下旬以後開花せるものは相當成育した。早咲の果で成熟したものは全部ハチマキを生じ且つ其程度甚だしく、開花時期の晩くなるに従いハチマキ果の發生率少くなり、且つ程度も輕くなつた。枯死果の大部分は開花後殆んど生長せず未だ小さい中に枯死したものであるが、一部は 1cm になつてから枯死していた。幾分生長し 1~1.5cm になつて枯死したものは早咲きのものでは 1 月 10~11 日或は 17~22 日の低温直後枯死し、その後開花したものは 1 月 24~31 日、2 月 8~10 日、同 23~24 日の低温直後枯死した。3 月 16 日の調査に於ては 2 月 14 日開花のものは全部果の長徑(縦)は 1cm 未滿、1 月 24 日及び其以前開花のものは 1~1.5cm であつた。又 4 月 8 日調査の際は全部 1.5~1.8cm であつて、4 月 16 日調査の際果の中央に輪狀に稍變色陷凹しているのが認められた。他の同様の輪狀變色陷凹部を生じた果を採取して其切片を作り檢した所、輪狀陷凹部の果皮は變色枯死しておつた。

ハチマキ果の發生

5 月中旬に至り、果皮表面の毛が少しく脱落を始め、

輪狀陷凹部は既に陷凹度を著しく減じ、果皮表面は粗皮病の如く著しく粗となつた。即ち明らかにハチマキ果を形成したのである。此ハチマキ狀を呈する個所は初めは果の中央であるが果の生育するに従い漸次上位になる。此は果の生長最も盛な線を侵され輪狀となり且つ果の下部が生育を續ける爲であるうと考えられる。

發生と環境

樹の葉の繁茂した下(内側)の果には、このようなハチマキ果は少く樹の外側(果の上方に葉其他のない場所)の果に多いことを認めた。

場 所	調査果數	健全果數	鉢巻果數	同百分率
葉 蔭 (内側)	125	111	14	11.2
葉 外 (外側)	132	18	114	86.4

なお納所の栽培地では從來鉢巻果の發生は傾斜に少く、傾斜面の麓に多く、且つ傾斜面では北面した所に少く、南面した所及朝日の早く(日出と共に)射す所に多いと言われる。昭和 15 年は傾斜面にも相當發生し、12 月上旬中に開花したものの約 70% は鉢巻果となつた。しかし傾斜面のものは枯死率は少かつたが傾斜面の麓(裾)に於ては枯死したものが頗る多かつた。

考 察

以上の結果を綜合すると枇杷鉢巻果の發生原因は寒害(霜害)と認められる。昭和 15 年は最低氣温が平年に比べて低温の日が多かつた爲、早咲き果は殆んど枯死落果し、1 月中旬以後の晩咲きのものが生育したが、此に鉢巻果を多數生じたのである。尙 2 月中旬開花したものは鉢巻果の數が他のものに比べて少なかつたが、果形小さく味は悪かつた。故に早咲き(12 月中旬開花)のものに保温の手段をさつて、鉢巻果の發生を防止することが必要である。保温の方法としては 1 月中旬頃から 3 月中旬頃まで、果より 1 尺以上離して褐色紙袋掛等を試みるのもよいと思われる。又園の上部に樹木或は筵等で垣狀のものを作り、山上より冷氣流の降下するのを防止する方法も考えられる。(前橋農事改良實驗所金島試驗地)